

四旬節第四主日  
ルカ 15・1-3、11-32  
放蕩息子の福音

2013.3.10 9:30 ミサ  
オリビエ・シェガレ  
(パリミッション会司祭)

今日本でもよく知られている感動的な放蕩息子のたとえ話を聞いた。わかりやすいこの譬えについて、余計な説明はいらないし、むしろ理解の邪魔となるだろう。皆さん一人一人の体験に照らし合わせて心の中でこの譬えを味わい、それぞれの受け止め方によって解釈すればいいと思う。

私としてはこのたとえ話を聞くたびに、40年前札幌にいた時に読んだ二つの北海道新聞の記事を思い出す。一つは社会面の記事で、家出していた青少年のことを報道していた。内容は、少年は家を出て、親は心配していたので警察に届けたが、三日目には少年は寒さに耐えられなく、家に帰ってきたという内容だった。日常茶飯事で大した記事ではなかったが、少年の父への弁明は、来日していたばかりのわたしにとって興味深く、今も忘れられない。「ぼくは家があれば、家に甘えてしまうと思った。ぼくの人生は自分で作っていきたいのだ。このまま卒業して、就職しても、おそらく気の弱い、少しわがままのサラリーマンになってしまう。その生き方に満足できないぼくの行動を認めてほしい」。少年は家にいる限り、衣食住が保証されるし、親に助けられながら、幼稚園の時から出世のルールに乗って、いい学校、いい大学、いい就職できて、将来も保証されてきた。だがこうして用意されている未来が見えすぎて、冒険も驚きもない人生を生きる意味がない、と。あの記事を読んだ時に、家を出て、日本という遠い国へ飛んできた私が、少年の気持ちが伝わってきて、深く共感した覚えがある。そしてこの少年の気持ちはまさに放蕩息子の気持ちではなかったかと後で思うようになった。放蕩息子は少年と同様に、家に甘えれば、真の未来がない。親の所に居続けるよりも、家を出て、様々な挑戦と出会って、豊かな人生を行きたい、これほど尊い願望はないかと思う。

もう一つの記事は当時若者が燃えていた安保闘争と関係しているが、親の反対を押し切って学生デモに参加していた娘の父への問いかけの記録だった。「時には苦しいデモの中で、私は多くのことを考えます。そこには学校、家庭、友人から離れ何にも煩わされない、純粋な、自分の考えを貫こうとする裸の自分があるだけです。そのすばらしさを、大人は知らない。知ろうともしないのではないか。家庭、出世、そんなことにとらわれてしまって、行動ができないのではないか」。この娘の大人社会への疑問は放蕩息子の心にも響いていたのでは

ないか、と。親に守られて、無事な家の環境に留まるより、思い切ってデモに出て、夢中になって充実した気分を味わうこと。我を忘れて、社会のために自分を捧げる喜び。このような生き方は尊いではないか。放蕩息子のたとえに戻るが、父は決して家を出ようとして、いろいろ試してみたい息子の気持ちを退けるのではないし、息子を止めずに、すぐ財産の分を譲り渡した。そして頑張ってくださいと見送りして励ましていたかも知れません。

では、さっきの少年と娘、放蕩息子の行動は何がいけなかっただろうか。財産を無駄遣いしたことだけではないと思う。これは私の意見だが、いけなかったのは、やりたいことをやろうとした時に、親と家族との関係を切り、家族の交わりを放棄し、他の人を無視して自分だけの幸せを求めたことではないかと思う。誰とも相談しない、他者の気持ちにまったく配慮しないで、自分の欲望のまま即行動してしまったことはやはり良くなかったでしょう。共同体や家族を無視して、父との交わりを放棄してしまった結果、財産だけではなく、我を失ってしまった。放蕩息子はどうしようもない孤独の状態に陥ってしまったとき、我に帰り、父の所に戻って行こうと決意をする。彼は弁明を用意していないし、あっさり「お父さんに対して罪を犯しました。もう息子と呼ばれえる資格がない」と言う。さっきの少年もそうだったが、放蕩と呼ばれているこの息子の心がきれいで、彼の素直さに感動せざるを得ない。やがて赦された彼は、父と家族の交わりに復帰する。戻ったときに彼は変わっていたのではないか。失敗を通して、いろいろな反省ができたわけではない。再び受け入れて下さった父の優しさと寛容さ、家族の温かさを初めて実感できた。父の愛を体験することによって、自信を取り戻し、将来への希望が湧いてきたでしょう。私たちも神に赦されていると知った時、初めて神の愛に触れ、大きな喜び、大きな希望とつながる。

弟と対照的に描かれている兄の方はまじめで、家のしきたりを守り、出ようと思ったことはない。彼にとって生活の保証も、父の愛も当たり前で、心からの感謝は湧いてこない。彼は、弟が無事に家に帰ったことを喜ぶどころか、父の優しさを非難して、不平ばかり言う。彼は同じ屋根の下にいながら家の中にいる人々の心とつながっていないようだ。元々皆の交わりに入っていないくて、愛の実感がない彼はむしろ気の毒に思われる。彼は、時々ミサに預かっても皆の交わりに入ろうとしない、神さまに感謝と口で言いながら、兄弟たちと心がつながっていない私たちに似ているかもしれない。

しかしたとえ話のテーマは、罪深い私たちのことよりも、父なる神はどんな方であるかまず教えてくれるような気がする。この神の深い憐れみは、私たちの正義感をはるかに超えて、厳しい裁判官のような方ではなく、私たちが豊かに生きることを望んでおられる。この父は、弟に示したのと同じぐらいの優しさをお兄さんに示し、とがめることなく、優しく問いかけて下さる。「お前のあ

の弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかった。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか」。話はそれで終わるが、きっとその兄も反省して、我に返り、父の愛を実感し、冷たい心を改めて、弟を迎えていたと思う。

神さまは今も家の交わりから離れようとしている罪深い私たちの回心を待って、離れた私たちが父の家の交わりに帰っていた時に、大喜びとなり、その喜びを皆と分かち合いたい。

ミサを通して、我に返り、共におられる父なる神の家に帰り、赦されたことの喜びを互いに分かち合えますように。